
日付屋 あした、たいようののぼるあしたに

千草ゆう来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日付屋 あした、たいようののぼるあしたに

【Nコード】

N9671A

【作者名】

千草ゆう来

【あらすじ】

「日付」のない国で、青年と少女は出会った。恋人ジェイドとの約束のために、「日付」が欲しい青年ウィル。「日付」を売る少女ダイア。出会いは何かを変えるだろうか？

第一話（前書き）

全年齢対象ですが、同性愛を含みます。

第一話

世界の果てかあるいは真ん中か、それとも微妙に南東とかそんな方角かもしれない、とりあえず島国でもなく海辺でもない、大陸のどこかにある国で。

いくらか前に、ウィルは生まれた。

ウィルは名前。名字はない。

昔、まだウィルの父が幼かったころにあつた戦争の前まではあつたようだが、今では政府のえらい役人が貴族しか、名字を名乗ることとはできなくなった。

母は「本当はメイにしようって言うてたのよ。でも女の子の名前みたいでしょ」と得意そうに笑つた。どうやら父の案だったらしいが、詳しいことは知らない。父は、妹のメイが生まれたのとほぼ時を同じくして亡くなつた。ウィルはようやく言葉を話せるようになったばかりだつた。

ウィルは今、だいたい大人である。

だいたいというのは、まだ妻も子どももないが、一人前に塗装屋としての仕事をしているからだ。同じ塗装屋にはジェイドという幼なじみがいて、ジェイドはウィルが生まれるより少し前に生まれたいらしいが、彼もまだいたい大人だ。

大人としての区切りは、婚姻と決まっている。だから、まだウィルはいちおう大人ではない。

なぜそんなややこしいことになっているかというと、この国には「日付」がないからだ。

日付が欲しいとき、たとえば誰かが生まれたときや死んだとき、結婚するときなどには、役場の近くにある日付屋で日付を買つてくる。

ウィルはイザルの月の二十一日の生まれだが、それは父が日付を買ってくれたからある誕生日だ。だがいつの季節のいつになったら

もう一度イザルの月の二十一日が巡ってくるのかをウィルは知らないし、この町のだれも知らないのだ。役場の三階にずっと住んでいる役人と、日付屋の人以外は。

だから、いつになったら大人になるのかを知る人もいない。

でもウィルはそのことに疑問や不安を感じたことはなかった。イザルの月の二十一日に、両親が生んでくれたウィルという自分がいる、それで十分なのだと思っていた。

ウィルたちの住む町は、山間にぽっかりとあいた盆地にある。周りを深い森に囲まれているが、ちょうど峠へ向かう旅行者や商人が最後の休息を取る町として、だいたい年中、それなりに賑わっていた。

町の中心部は盆地のほぼ真ん中に位置し、住宅や店々はそれを取り囲むように成り立っている。ウィルの実家は中心部から近くも遠くもないあたりにあったが、勤める塗装屋が町はずれなので、毎日いくらかの時間をかけて歩く。

しかし今日は塗装の仕事で、町の中心部に呼び出されていた。

「窓枠がそんな簡単に外れるもんか。どうせガキどもが壊したんだろ」

ウィルの隣で仕事道具が山盛りに載った荷車を引きながら、ぶつぶつ文句をたれているのは、相棒のジェイドだ。

本来塗装屋の仕事ではない、窓枠の修理という仕事を役人の「似たようなもんだろ」というわがままで引き受けさせられたうえ、修理費を値切ろうとされたので、機嫌が悪いのだ。しかもジェイドは子ども嫌い。

「まあまあ。もう今くらいなら学校に残ってる子どももいないよ」

ウィルは苦笑しながらジェイドを振り返る。ジェイドも世間でいう結婚適齢期というやつにそろそろ入るのだから、いまだに子ども嫌いだ。

「そうであることを願うぜ」

ジェイドは肩をすくめて、また前を見据えた。

ウィルはそんなジェイドを斜め後ろからすこし見上げながら、ふと笑みをこぼす。

おやじさんは若いウィルたちふたりだけで仕事に出すのをためらったようだが、ウィルにしてみれば振って沸いた幸運だ。ふだん、気さくな先輩たちに囲まれながら仕事をするのも楽しいが、ジェイドとふたりで歩くのはまたちがう。

今日じゃなきやいやだ！と駄々をこねた、服屋のおかみさんに礼を言いたい気分だ。おかみさんの我儘のせいで、他の面子はみな服屋の施工にかかりきりになってしまい、あまりおかみさんに重要視されていないウィルとジェイドだけがふたりで出てこれたのだから「なんでジェイドは子ども嫌いなんだろうなあ」

ウィルがぼつんと呟くと、ウィルの視線よりも少し高いところでジェイドが唇をとがらせた。

「しょうがねえじゃん、なんかあの、意味不明な生き物なのがダメなんだよ」

「あそ。よくジェイド、ぼくのこと大丈夫だったね」

ふたりの家は近所で、母親同士も仲がいいはずだから、先に生まれていたジェイドはウィルの世話をしていたはずだったが。

「自分も子どもだった時はよかったんだよ」

「そりゃあジェイドにも子ども時代があっただんだよなあ」

「なんだよお前、その目」

「いいえー別になんでもー？」

ジェイドの子ども時代なんて自分もさらに子どもだったから、少し背の高い彼を見上げて追いかけていたことしか記憶にないが。しかも今もジェイドのほづがいくらか長身だが。

考えれば、今の自分よりも小さい彼だっていたわけで。

うわムカツク、と舌打ちしながらデコピンしてくるジェイドに、腹にパンチをお見舞いすることで反撃しながら、ウィルは小さいジェイドを妄想しながら面白い気分になっていた。

「お前は妹いるから子ども好きになんのかな」

「どうだろう？ そんなにメイも小さいってわけじゃないけどね」

メイは今年からパン屋の売り子として働いている。

「だよな。メイ、俺たちより先に大人になるだろうしな」

そのパン屋の次男坊と仲良くやっているというもっぱらの噂で、しかも長男は首都へ科学者になる勉強をしに行っているから、嫁入りももうすぐじゃないかと近所でささやかれている。

「ぼくらは一生大人にならないよね、きつと」

きつと、という言葉をつけ足してしまったのは、約束が永遠でないことを既に知ってしまった大人だから。だがジェイドはすぐに気づいて言った。

「きつと、じゃなく絶対、だけどな」

絶対を言うなら、日付が欲しい。

せめてウィルが生まれ日を教わったように、日付を買いたい。だがそんなことが、出生でも婚姻でもないのに許されるわけもないのだろう。

徐々に上り始める眩しい日差しに、ふと、今日は何の月の何日なんだろう、と考えるはいけないことを考えてしまい、頭を振って取り消した。

第二話

落としてきた、と気づいたのは、ベッドに寝転がった瞬間だった。風呂屋にも行って頭を洗って、着替えもすませている。もちろん夕食も。硝子などはめることのできない庶民住宅の木窓の向こうは、すでにとつぷり暮れて、真向かいの家の窓から漏れているランタンの明かりがちょうど見える。

たかがタオルひとつだ。

ウィルは深呼吸した。でもあれは。

貰いものなのだ、ジェイドからの。この間、ようやく塗装屋のおやじさんに一人前認定をされた時に、お祝いとしてジェイドが買ってくれたのだ。

まさかそれを、こんなに早く落としてしまうわけにはいかない。しよっちゅう持ち歩いているから、そろそろ汚れてきてはいるが、そのままにしておいて次の日現場に行ったときにジェイドに見つけるのもばつが悪い。なにより、先にほかの誰かに見つかって、汚いタオルだなどでも思われて処分されてしまうのが一番いやだ。

ウィルは立ち上がった。

新しいシャツとズボンを小さなワードローブから取り出して身につける。居間に顔を出したら、ちょうど母は風呂屋へ行っていて、妹のメイがだれかから貰ったのか、新聞を読んでいた。

「ちよつと出かけて来るよ」

廊下から声をかけると、メイは顔を上げずに頷いた。

「うん」

文章に夢中になっているときは、何を言われても耳に入っていないのは、ウィルもそうだから理解できる。どうせすぐ戻るのだし、メモを残さなくても大丈夫だろう。

ウィルはサンダルをつっかけて外へ出た。

やや早足で道を進んでいく。家々からこぼれるわずかな明かりを頼りに、学校の裏手まで、さほど多くを歩かずにたどり着いたが、着いてからはたと気づいた。

ここまでは明かりがあつたけど、学校の裏手なんかには明かりがあるわけじゃないか、家にいた時のぼく！

どこかの家からランタンを借りようかとも思つたが、そんなことをしては、なぜ夜にこんな場所へ来たのか、一から説明しなければならぬ。タオルひとつを取りに来たと言っても、怪しまれるだけだろう。

途方に暮れて、辺りを見回したところで。

ふと、一軒の家の明かりが目に入った。

学校のすぐそばの家。いや正確には家ではなく、「日付屋」。

文字通り日付を売る、政府直営の店だ。店員は常に店の中にいて、めつたに表へ出てくることがない。食料などは役場の役人が運び、日付屋自身は一生を店の中で過ごすというのがもつぱらの噂だつた。誕生や婚姻、死去の際に日付を買いに行った大人たちの証言もバラバラで、大人のうつくしい女性だという人もいればやんちゃな少年だという人もあり、女か男かわからない老人だという人もいた。

何人かの証言は重なっているの、日付屋は何人かいるのだろうということになっていたが、ウィルの家とさほど変わらない大きさのこの建物に、住めるのはどうがんばつたとしても、せいぜい四人か五人だろう。そんなバラバラな人物像の人たちが何十人もいるとは到底思えなかつた。

そんな得体の知れない、しかし見た目は多少頑丈な柱作りになっているだけのごくふつうの家から、今細い明かりが漏れている。

日付屋は政府の直轄だから、窓には硝子をはまっている。その向こうにはカーテンが引かれているが、わずかな隙間からは明らかにランタンの明かりが漏れていた。

人影がそこに映ることはない。だが、人がいるのは確かだろう。

もう日付屋の営業時間ではないが、民家に明かりを借りるよりは

問題がないように思える。断られたら諦めればいい。

そう自分に言い聞かせて、ウィルは体の向きを変えて日付屋へ向かった。

ドアをノックする。

目の詰まった木でできたドアは、男のウィルがこぶしで叩いてようやく音が響くほどの分厚さだ。これも政府直轄だからなのだろうか。

一度に二回、それを三度繰り返したところで、中からノックで返事があった。

「あのー、もう店終わってるのにすみません、ランタンかろうそくあったら貸してもらえませんか？」

すこし離れた民家には聞こえない程度に、声を張り上げる。

やや間があつて、もう一度、中から細かいノックが返ってきた。

これはどういう意味なのだろう、とウィルが首をかしげた瞬間、ギイと鈍い音を立てて重いドアが開いた。

だれもいない、と一瞬思いかけて、視線を落とすとそこに子どもが立っていた。

少女だった。ウィルよりはもちろんのこと、メイよりも小さい、学校に通う子どもたちと同じくらい小さな女の子だ。

このあたりでは珍しい、螺旋状の長い髪をかすかに揺らして、少女はウィルを見上げた。

「……終わり」

少女が指さすので、何のことかと思つたら、戸口の横に『日付屋』という看板があった。日付屋の営業は終わったという意味だろうか。「ああ、うん、それは知ってるんだけど。ちょっと落し物を取りに来ただけ、灯かりを持ってくるのを忘れてしまつて。貸してもらえないかな、と」

少女はじつとウィルを見上げていた。迷っているようにも見えず、ウィルの正体を疑っているようにも見えず。頭ふたつぶんくらいの身長差にもめげず、少女は目を泳がせることもなく、ウィルと

向き合っている。

やがて、少女はドアを支えていた手を離し、くるりと回れ右をして奥へ引っ込んでしまった。

「あ、あの！」

ウィルは慌ててドアを引きとめ、玄関に入る。

生まれて初めて入る日付屋は、営業時間外だからなのか、ほとんど暗くて、ただ正面に、学校の机のようなテーブルが置いてあり、椅子が手前に三つ、奥に一つあるのがぼんやりと見えた。ここに座って、日付を買うのだろうか。

さらにその奥から、明かりが漏れているところを見ると、そちらが日付屋たちの居住空間なのだろう。ほかに何人の日付屋がいるのかはわからなかったが、話し声が聞こえないところを見ると、仲が悪いのか、もしくは既に眠ってしまっていた後だったのかもしれない。

起こしてしまつて悪いことしたかなあ、と思ったところに、少女が奥からカーテンをかきわけて現れた。

無言で差し出されたのは、ふだんウィルたち庶民が使うのとさして変わらない大きさ、装丁のランタンだった。

「ありがとう。すぐ返しに来るよ」

少女はかすかに頷き、また奥へ引っ込んでしまった。

ランタンのおかげで、玄関付近は明るくなったが、学校の図書館のように壁に本が並んでいるわけでもなければ、むかし同級生たちと想像したように妖しげな文様が刻まれているわけでもなく、ごくふつ々の木造の壁だった。

すぐに学校に戻り、タオルを探す。ランタンのおかげで早く見つけた。だから、日付屋に返しに来るまでに、さほどかかってはいはずだ。

もう一度ノックをすると、今度はすぐにドアが開いた。

やはり巻き毛の少女が立っていた。

「ありがとう。すごく助かったよ」

ウィルがランタンを差し出ししながら軽く頭を下げると、少女はこくと頷く。

「あのさ……ひとつだけ、これとは別に訊きたいことがあるんだけど」

おずおずと言い出すと、少女はわずかに首をかしげて、すつとウィルに向かって手を伸ばした。慌ててよけると、少女はドアを閉めてカギをかけ、それからウィルを見上げた。

「……あ、うん。あのさ、日付ってどうやって買うの？」

少女はさも不思議そうに首を傾げる。

「日付って、子どもの誕生か、婚姻か死去のときにしか買えないんだよね。そうじゃないんだけど日付が欲しいときはどうしたらいいのか、わかる？」

たとえば、男の恋人と約束した日の日付を買うとか。

まさか具体的に言うわけにもいかず、ぼかしたが、少女はそれで理解したのかしないのか、

「買える」

と答えた。

「ん？ それは誕生でも婚姻でも死去でもないときでも、日付を売ってくれるってこと？」

少女は頷いた。

「でも……、ぼくは学校で、その三回しか日付屋は売ってくれないって習ったんだけど。大丈夫なの？」

再びこくり。

「じゃあ、……その、この次の夜に買いに来てもいい？ きみはいるかな？」

「いる」

「じゃあまた、太陽が沈んで月が出てしばらくしたら来るよ、今ぐらい暗くなったところに」

少女は同じ調子で頷く。

「ランタンを貸してくれてありがとう。なにかお礼も持ってくるよ。」

欲しいものはない？」

「……」

「じゃあ、この次の夜までに考えておいて。じゃあね」

椅子を引いて立ち上がり、日付屋を後にする。

少女は手も振らなかつたし、お辞儀もしなかつたが、黙ってドアに消えるウィルを見つめていた。まっすぐな瞳で。

無表情の、静かな少女。

それが、ウィルの初めて見た日付屋の姿だった。

第三話

話があるんだ、とウィルが改まって言い出したのは、工事の昼休憩のときだった。

学校側からふたりには、空き教室のひとつを資材置き場と休憩室として提供されていた。その資材も、既にほとんど工事に使用されてなくなり、がら空きの教室の真ん中に、ぽつんと椅子と机が四つだけある。体だけは大人の男には小さすぎる机と椅子をふたつ並べて、ふたりは弁当を開いていた。

「何だよ」

「あのさ、ジェイド。ぼくたち、恋人だよね？」

唐突に口にするにはあまりにも直接的な言葉すぎて、声をひそめたものの、思わず視線を外してしまった。

「……そうだよ？」

気配で、ジェイドが周りを見回したのがわかる。

教室のドアはきつちり閉めているし、校庭がこれほどうるさいのに、聞こえるはずもない。窓の外にだれもいないことだって、ウィルはきちんと見ている。

「なんだよお前、恋人できたとか言うんじゃないだろうな？」

あまりにもありえない答えに、思わず笑ってしまって、うるせえと今度はジェイドが頬を染める。

「それはありえないよ。じゃなくて、前の夜に、女の子に会って」「はあ？」

「夜に、学校に忘れ物を取りに来たんだよ。あの、今日の前の日、ぼく、上着を忘れて帰ったでしょう？」

ジェイドの前で、タオルを忘れたとは言いにくく、ウィルはとっさに嘘をついた。これくらいは許される嘘だろう。

「知らねえけど。それで、なんで女の子なんだ」

「取りに来たはいいけど、灯かりを忘れてて。どうしよう、でも民家に借りるにも、と思つたら、ふと隣の日付屋が目に入つて」

自然とジェイドの視線が日付屋の方角に向く。

「断られたら諦めればいいか、と思つてノックしたら、女の子が出てきたんだよ。日付屋の。そしてランタンを借りて、タ　じゃなくte上着を拾つて、その帰りに訊いてみたんだ。『誕生と婚姻と死去じゃなくても、日付を買うことはできないの』って」

「マジでそんなこと訊いたのかよ」

「マジだよ。女の子だし日付屋だし、大丈夫だろうと思つて」

同性愛なんておそらく知らないだろうし、日付屋は町の人たちとの交流をいっさい持たないから、彼女の口からウィルがそんなことを訊いたなんて漏れることはない。

「まあ、大丈夫だろうけど。んで？」

「売ってくれるって」

「マジでか！」

思わず声の大きくなったジェイドの口を片手で塞ぐ。

「うん。だからさ、その……、今日の夜、一緒に彼女に会いに行かない？」

「なんでだ？」

「……」

ウィルは思わず口ごもつた。

特に何もできる約束がないぼくたちにも、日付があればひとつの約束として見えるから、日付が欲しいのだと言つたら、ジェイドは笑うだろうか。

でもそれを説明しなければ、今日の夜に一緒に行くことはできない。

「……あのさ、ぼくらの記念に、日付を買わない？」

ジェイドがぼかんとした表情になるのを、ウィルはこわごわと見つめた。

「だから、……日付って、ひとつの目印だから」

ウィルだけでなく、ジェイドにも誕生日がある。ジェイドの両親が買い与えたものだ。ウィルとジェイドがもしこれからも続いていくとすれば、結婚するわけにもいかず、ずっと日付は自分の死まで得られない。

でも今、日付を買うことができるなら、それが正確にふたりの関係が始まった日ではなくとも、ひとつの証になる。

「……それでウィルが満足するなら、俺はいいけど」

ややしばらく考えて、ジェイドは答えた。

「俺は別に目印なんかなくても、ウィルがそばにいるならそれでいいと思つてつけど。ウィルが欲しいってんなら、あつたほうがいいのかもな」

「ありがとう」

ウィルの頬がゆるんだ。つられて、ジェイドも口の端を上げる。

思わず手を握りたくなつたけれど、万が一のことを考えてやめた。今ふたりの声が届く範囲に人がいないことは見ればわかるけれど、ふたりが見える範囲がどこまでかはわからないのだ。校庭でたまたま余所見をした生徒が、この教室の窓を見ていないとは限らない。

そんな、人目を気にする関係だとしても。

日付はひとつの印であり、証なのだと、ウィルは思ふ。

その夜、ふたりは別々に家を出て、学校の裏手のところで落ち合うことにした。

前の夜に日付屋の少女に会っていたのはウィルだけだから、ウィルではないと話が繋がらない。しかも、少女は他の日付屋の人がいるともいえないとも言わなかったから、少女ではない日付屋が出てきたら困る。

先に到着したのはジェイドだった。

壁に寄りかかって、地面にしゃがみこむ。窓のないところだから、建物の中にいる日付屋たちにもバレないだろう。

ウィルはまだ来ない。もう少し細かく、いつの時に家を出たらこのくらいの時に到着するというのがわかればいいのだが、あいにくこの国にそういった仕組みはない。太陽がどのくらいまで昇っているかで、朝、昼、夕、そしてその間、などというだいたいの「時」の見当はつくが、夜になってしまえばまったくわからなくなるのだった。

なんでそんな仕組みがなんだろう、とジェイドは考えた。自分のような莫伽ならばともかく、峠を越えた向こうまでも支配して役場を置けるような国王や、その役人たちならば考えられるのではないだろうか。

そんなことをつらつらと思っていた時だった。

こちらに向かってくる足音が聞こえてジェイドははっと意識をそちらに向けた。

ウィルの足音ではない。すくなくとも、ウィルはあんなに歩幅が狭くはないはずだ。それに、音が軽いところを見ると、体重の軽い女性か子どものような気がする。ウィルはジェイドよりはやや背も低いとはいえ、十分に男の体型だし、そこのオヤジたちよりは大きい。

足音はすぐそばで止まり、同時に気配がようやく伝わってきた。

子どもだ。ここにはまったく明かりがなくて、輪郭さえも見えないが、子どもにはまちがいない。

「……何？」

すこし待ってみたが、相手が何も言わないので、ジェイドは自分から話しかけた。

だが返事はない。

「俺に何か用？」

すこしイラッときて、トゲのある口調になる。

それでも相手はすぐには答えず、もう一度「何か用かよ」と言おうとした瞬間に、

「迎え」

という意味不明な答えが返ってきた。

細い女の声。気配の大きさとあわせて考えて、おそらく少女だろう。だが声の落ち着き具合と、声の降ってきた高さからして、ジェイドのもっとも苦手とする、学校に入るか入らないかくらいの大きさの子どもでもないことはわずかに救いだった。

「迎えって？　俺を迎えに来たの？」

わかりにくいのが、頷いた気配がする。

「日付」

さらに意味不明なことを少女は言う。

日付がどうした。

あ、もしかしてこの少女が、ウィルが昼間言っていた日付屋の少女だろうか。

「もしやお前が日付屋ってわけ？」

得心して言うと、少女も頷く。

「そか、俺を迎えに来たんだな。ウィル　昨日お前に会った男はもう着いてるのか？」

少女は首を振った。

「でもお前、俺が今日来るやつだってわかったの？」

これには少女は答えなかった。日付屋は日付がわかるくらいだから、特殊な能力があるのかもしれない、とジェイドは思う。

「じゃ、付いていきますよ日付屋サン」

ジェイドはズボンをはらって立ち上がった。

そこへちようど、ばたばたと足音が近づいてくる。今度こそ、ウィルにまちがいない。

「ごめん、ばくのほうが遅かったね。　え、きみ、ジェイドがぼくの相方だってわかったの？」

ウィルも驚いているのを聞くと、ウィルが彼女に、ジェイドを迎

えに行くように頼んだわけではなかったらしい。

少女はうなづき、半回転して日付屋の方向に歩き始めた。
ふたりもそれに続く。

「ね、彼女がぼくの浮気相手じゃないこと、わかったでしょう？」
ウィルが耳もとでそんなことを囁いたので、わき腹をつねってや
った。

「彼女が聞いてたらどうすんだよ」

「大丈夫だよ」

ウィルの言ったとおり、彼女はまったく振り返ることも、足を止
めることもなかった。

なんだか不思議な子だな、というのが、ジェイドの初めて日付屋
を見た感想だった。

まるで人間じゃないみたいだ、と一瞬思ったことは、すぐに頭の
中で取り消した。どうせ子どもというのはぜんぶ、人間とは似て非
なる生きものなのだ、ジェイドにとっては。

第四話

少女はウィルとジェイドを日付屋に案内した。

日付屋内部の暗さと、テーブルなどの配置はまったく昨日のままだったが、昨日彼女がもって来たのよりも小ぶりのランタンが、当たり前のようにテーブルの端に置かれていた。

そして、テーブルの前にあった椅子が、昨日は三つだったのに今日は二つになっている。どこへ行ったのだろう、と見回すと、すぐに壁際に追いやられているのを見つけられた。

日付屋は、来る客の人数を見て取って椅子を用意するのだろうか？　しかし、ウィルは「次の夜は二人で来るから」などとは言わなかったはずだ。なぜ少女はわかったのだろうか？

ただ、それを少女に訊いても答えは返ってこないような気がして、ウィルは何も言わず、ジェイドの隣の椅子に腰を下ろした。

「えっと、今の前の夜はありがとう」

ウィルはまずそう述べて、軽く頭を下げた。

ジェイドが何のことだろうと見上げているから、

「ランタン、貸してくれて」

と少女に言うふりをして主にジェイドのために付け足した。

「今さらだけど、ぼくの名前はウィル。彼はジェイドという」

少女はこくと頷いた。

「きみにも、名前はあるの？」

興味半分で訊いてみたら、少女はいつもよりもほんの少し目を大きくした。

「ダイア」

少女の答えは、相変わらず無表情の無抑揚だったけれども、今までの受け答えよりもなにがしかの感情が感じられるのは気のせいだろうか。

「ダイアちゃん。あ、なんかそれもおかしいな。ダイアと呼んでもいい？」

少女　ダイアはふたたび頷いた。

「ダイア、今の前の夜に言っていたお礼なんだけど、なにか欲しいものは思いついた？」

ジェイドが「なんだそれ」という顔をしてウィルを見ている。「お礼に何かあげるよ、という約束をしたんだよ」とウィルは説明した。

ダイアは長いまつげを伏せて、考えている様子だ。ジェイドがその沈黙に飽きてきて、足を組み替えたところで、ダイアが目を上げた。

「ドーナ」

「ドーナ??」

ウィルとジェイドは顔を見合わせた。

ドーナとは人の名前だろうか。ドーナという友達の子に会いたいか？ でなければ、ウィルもジェイドも知らない場所の名前？ それとも、そんなおもちゃがあっただろうか。

ダイアはもう一度考えてから、細くて白い指で輪を作って見せた。「あー、ドーナツッ！」

ジェイドが叫ぶ。

少女はすこしうれしそうにも見える表情で頷いた。

「ドーナツッが食べたいの？ それくらいならお安いご用だよね」

「『お安いご用』なんて今どきだれも言わないけどな」

ジェイドが茶々を入れて、ウィルが頭をはたく。「うるさいな、慣用句を使っただけじゃないか」「ウィルは頭の中がジジくさいからな」

ふたりのやり取りを、ダイアがじっと見ていることに気づいて、ふたりは慌てて手を膝の上に戻す。

軽く咳払いして、ウィルは本題を切り出した。

「……えっと、今日ぼくらは日付を買いに来ただけど」

上着の内ポケットから、封筒を取り出す。もちろん入っているのは札束。日付は安いものではない。具体的にいくらするのかわからなかったから、とりあえず今あるぶんだけの金を持ってきた。

ジェイドが「あ、俺も」と自分の内ポケットに手をつ込むのと、ダイヤが口を開いたのは同時だった。

「サラの月の一日」

一瞬、何のことだが、頭が理解しなかった。

しばらく考えて、ようやく頭の中にダイヤの言葉が染みていく。

「サラの月、いちにち……」

流し込むように、もう一度自分で呟く。

今度はウィル自身の声が胸の中に流れていき、じわじわと胸の底に到達したところから、暖かくなるような気がした。

「……で、それでいくらなんだ？」

ウィルよりも感慨をいだかなかつたらしい、ジェイドがいち早くわれに返って訊く。

ダイヤは首を振った。

「いいや、じゃなくてよ。値段を訊いてんだよ」

不可解な答えに、子ども嫌いが発動したのか、イライラした口調でジェイドはもう一度ダイヤに迫る。

だが、もう一度ダイヤは首を振った。

「ドーナ」

「いや、ドーナッツは買ってやるから。それは前の夜の、ウィルがする礼だろ？　じゃなくて、今日の日付の値段だよ」

「……ドーナ」

ダイヤはまた繰り返す。

その他にも何か言いたいことがあるのか、周りを見回して、説明に使えるようなものを探しているようだが、あいにくここには机と椅子と壁以外、何もない。

「お金じゃなく、ドーナッツでいいってこと？」

ウィルが口を挟むと、ダイヤはこくと頷いた。

「そんなわけにはいかないよ、日付は高いんでしょう?」

「……終わり」

ダリアは再び短い台詞を返した。

「終わりって何が?」

「……」

こんな押し問答は終わりという意味だろうか。それともダイアとの面会時間が終わりという意味だろうか。あるいは、こうしてふたりと会うのが終わり。なんてわけはないだろう、さっきドーナツの約束をしたばかりだ。

「じゃあ、今日の次の夜にまたドーナツを持って来るよ。それでいい?」

ダイアは頷く。

「帰ろう、ジェイド」

「だけだよ……」

「ダイアがいつって言うんだからいいんだよ、きっと。じゃあねダイア」

ドアの前でウィルが手を振ると、ダイアはおずおずと手をあげて、ぎこちない振り方で手を振り返した。それはようやく言葉を喋れるようになったくらいの子どもの小さな子どもが振るやり方に似ていて、やや滑稽で、可愛らしかった。

ウィルに促されて、ジェイドも大きな手を振る。

「またね」

ウィルが言うと、ダイアは意味を考えるように目を泳がせてから、彼女も小さな声で「またね」と繰り返した。

たとえ真つ暗な夜だとしても、帰り道は並んで歩かず、出来る限り別の道を通る。なぜならだれかに見られる可能性がないとも限ら

ないし、並べば無言というわけにも行かず、話を聞かれたら余計に変なうわさが立つこともあるから。

ふたりでもうずいぶん前から決めていたことだったので、日付屋を出てすぐにウィルは何も言わずジェイドから離れようとしたが、ジェイドがその肩を掴んで呼び止めた。

「ちよつと訊きたいことがあるんだけど」

口調ははつきりとしていたが、怒っているわけでもなさそうだったので、ウィルは少しほつとして、「何？」と振り向く。

「この時間なら学校の裏、だれもないよな？」

ウィルは頷く。さつき待ち合わせした場所ならば、だれに見つかるということもないだろう。そもそも学校は夜間、見回りなどない。当直のじじいがいるにはいるが、日の入りと共に寝くさることはウィルやジェイドの子ども時代からの周知の事実だった。

地面がぬれていないことを確認して、腰を下ろす。

「あのダイアって子のことなんだけどよ」

ジェイドが切り出し、ウィルは闇で見えないジェイドの方向に顔を向けた。

「あの子が日付屋なんだよな？」

「そうだよ」

「……何なんだ？」

「どういう意味？」

「うまく説明できねえんだけどよ、……ホントに人間か、あれ？」

初対面で得た印象を、失礼だと思ったから消そうとしたが、彼女と話すうちに余計にその印象は深くなっていった。ジェイドが子ども嫌いだから、というわけではないと思う。彼女は、ふつうの子どもとは違う。

「……人間だと、思うよ」

思う、などという曖昧な表現を使うということは、ウィルも疑っているのだろうか。

「いや、人間なのはまちがいないけど。だって機械じゃないことは、

動きを見ればジェイドもわかるだろう?」

「まあな。魔法なんてのは童話か吟遊詩人の世界にしかねえし」

「そうだよな。だから、人間だけど……ふつうの女の子ではないような気は、ぼくもしていた」

「だろうな。だいたい、いくらなんでも学校には行ってそんな大きなのくせに、あんな短い言葉しか喋れないって変じゃねえか?」

「うん。でもそれは、日付屋だから学校に行っていないんじゃないかと、ぼくは思ったんだけど」

「学校に行ってなくても、言葉くらい喋れるだろ」

「そうかな? それに日付屋について、ジェイドもおばあさんとかオヤジとか、そういう話を聞いたことがあるでしょう? けど今日行ってわかったと思うけど、あの奥に部屋があるのは見えても、そこにだれかがいる気配はしない」

「なんだよ、あのダイアって子が変わってババアとかオヤジになってるって言うのか?」

「そうは言わないけど……、得体の知れない、というのは事実かもしれない」

ウィルがため息をついた。

ジェイドとちがってウィルは子ども好きだし、あまり仲のよくないやつのことでも心配してしまう、ジェイドには理解できないやさしさを持っているから、あのダイアという少女のことでも心配しているのだろうきつと。そういうやさしさに嫉妬する自分はガキなのだとわかってはいてもイライラして、しまいには面倒くさくなって、ジェイドはダイアについて考えることをやめた。

「ま、とりあえず帰るぞ」

尻をはらって立ち上がると、ウィルも慌ててそれに続く。

学校を出て道を別れるときに、パンツと一度だけ手のひらを合わせた。

「次の夜は、ドーナッツ持って集合だからね」

「おう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9671a/>

日付屋 あした、たいようののぼるあしたに

2010年10月12日07時35分発行